

春夏秋冬

# 台湾徒然



第51回

## 五月の雪

最近話題を集めているイベントに「アブラギリ祭り」なるものがある。

範囲は台湾各地に及ぶが、いずれも本島西部の丘陵地帯に属し、客家の人たちの居住区と重複することから、「客家油桐祭」などとも称される。

アブラギリは10年で数メートルの高さに達する落葉樹で、大きな身の丈の隅々に枝を張り、白くて小さい花をいっぱい咲かせる。ただ花季が短いことから、むしろ散ったあとの風情を「五月の雪」と讃えて、白い絨毯の散歩を楽しむという趣向になっている。

「明再興」を号して鄭成功が台湾を攻略したのは17世紀半ばだが、以来多くの漢人が大陸から渡来した。最初にやってきた福建人は西部の平野を占拠し、遅れてやってきた客家人は、山地と平野の境目に点々と集落を築いた。耕地が少ない上に、山間部には首狩の風習をもつ先住民がいたことから彼らの生活は苦難を極める。

客家に工芸職人が多いのはそのせいもある。彼らは大陸からアブラギリを移植し、その実を活用した。実からは、その名の通り桐油がとれる。工業用のみならず、防水効果があるので唐傘に塗られたり、溶剤に使われたりした。また幹はマッチ棒や製紙に利用され、実に「役に立つ」木だったのである。

しかし実際に大量に植樹されたのは、70年代から80年にかけて、つい二、三十年前のこと。それは日本に輸出するためだったといわれているが、この時期に大量の桐を台湾から輸入したという記録をみることがない。

実はアブラギリと日本の桐は似ても似つかぬものである。前者はトウダイグサ目トウダイグサ科、後者はゴマノハグサ目ゴマノハグサ科、そもそも花がまったく異なる（桐は薄紫で筒状）。それを誤解したのか、あるいは騙されたのか、日本は桐を高く買ってくれると周辺の山腹を伐採しては植えていた

時期があつたのである。

しかし日本は買ってはくれなかった。桐の筆筒、下駄といえ、最高級品である。まがいものに手を出す業者がいるはずもなかった。アブラギリは無用の長物として打ち捨てられ、4月になると皮肉にも美しい花を咲かせた。地元の人を見向きもしなかったが、我々は高速道路を通るたびに、あの白い群れはなんだろうと眺めていたもののである。それがいまや、地域興しの起爆剤になっているのだから、世の中、塞翁



大きな木の下は白い絨毯を敷き詰めたよう

が馬、なにが身を助けるかわからない。実は沖繩にも同じようなことがある。

北部のやんばる地方では、この木をトウンジュと呼ぶ。その方面に詳しい人は、シナノアブラギリのことだと教えてくれる。桐の中国語の発音が「トオン」であることから、そうした呼び名が広まったのではないかと勝手に想像してみる。沖繩でも商業作物として大陸から移植され、油や膠に類するものをつた。膠は、三線の蛇草を貼るのに使ったりしたともいう。これらの木も今では使われなくなった。若者たちはほとんどのその木の由来すら知らなくなっていたのだが、昨今、この木の花見が当地で盛んである。今年の黄金週間も大勢の花見客がやんばるに押し寄せた。

油桐という不思議な運命を背負った木は、福建原産。台湾と沖繩にそれぞれ移植され、それぞれの樹生を歩んでいるのである。

### 柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たち」の聖戦（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）